神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	相模国三浦氏と周防国 ―三浦義澄と平子重経―
著者	阿部正道
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告　第 10 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1982 年（昭和 57 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

相模国三浦氏と周防国

——三浦義澄と平子重経——

阿　部　正　道

はじめに

鎌倉幕府創立の原動力は，源頼朝の治承4年（1180）8月，平氏討滅の挙兵以来，その旗下に参加し，戦場で活躍した東国武士の力によるものであった。幕府創業期に於ける，源平合戦，奥州征討，承久の乱などによるこれら武士団の遠征は，幕府政治に御家人として参加したこれら武士の諸国に対する地理的視野を広め，守護，地頭制度による鎌倉幕府の全国支配の段階にその役割を果たしたものといえよう。相模の三浦一族は，伊豆の北条氏などと並び，頼朝挙兵当時からの功臣の列に連なるものであり，頼朝没後も幕府内での有力御家人としてその勢力をふるい，一族は守護，地頭となり，諸国に及んだ。

本稿は，以上の観点から，これら諸国の内，古代山陽大路に面する周防国をとりあげ，三浦氏との関連について述べるものである。即ち，源平合戦当時，同国での三浦義澄の功業と同国仁保荘地頭に補任されたその支族，平子重経を中心とする調査報告である。

1　三浦義澄（1127年～1200年）の出自

桓武平氏出自の三浦氏は，平良文の孫，為通が相模国三浦に住い，始めて三浦を号した。(1) その子為継は，後三年の役（1033～87）で八幡太郎義家に従い，奥州で活躍した。(2) その子義継の孫，義明は頼朝の父，義朝が天養元年（1144）鎌倉の館から大庭御厨に乱入当時から従軍している。(3) 平治の乱（1159）当時，義澄は義朝の軍に参加し，(4) 伊豆の頼朝の挙兵計画にも参与した。(5) 頼朝挙兵当時，相模国三浦郡衣笠の本城にあった族長三浦義明が，ただちにその召に応じ，城を枕に頼朝にその命を捧げたのは(6) 以上の源氏との関係によるものであり，一方，時勢を見通してのことであったといえよう。

義明の長男，杉本太郎義宗は，長寛元年（1163）安房国合戦（長狭城攻めと伝える）の

1．桓武平氏系図(群書類従巻138)

桓武天皇 ---- 高望王（始賜平姓）
- 国香 — 貞盛
- 良将 — 将門
- 良兼
- 良持(良茂)
- 良文 — 忠頼 — 忠通

2．三浦系図(群書類従巻138)

- 村岡五郎 忠通 ― 始号三浦 爲通 ― 爲継 ― 庄司介 義継
  - 大　介 義明
    - 杉本太郎 義　宗 ― 和田小太郎 義盛
    - 矢部次郎三浦介 義　澄 ― 三浦介 義村 ― 三浦介 泰村
    - 大多和三郎 義　久 ― 義成
    - 多々良四郎 義　春 ― 重春
    - 長井五郎 義　秀
    - 杜戸六郎 重　行
    - 佐原十郎 義　連 ― 盛連 ― 三浦介 盛時
  - 津久井次郎 義行 ― 爲行
  - 芦名三郎 爲清 ― 爲安(保)
  - 岡崎四郎 義實
    - 真田与一 義忠
    - 土屋小次郎 義清

- 義澄
  - 山口二郎 有　継
  - 義　村
    - 泰村× ― 景村×
    - 光村× ― 駒王丸×
    - 家村 ----
      - 宝治合戦行方不知
      - 子孫　(伝三河国閑居)
      - 三浦志摩守正次(三浦子爵家祖)
    - 胤村(出家)　(伝奥州大槌港逃 衣笠住岩間氏祖)
    - 女子　北条泰時室　時氏母　後嫁盛連　光盛、盛時、時連母
  - 大河戸 重　澄
  - 胤　義　承久合戦京方
  - 友　澄　承久合戦討死

- 佐原十郎 義連
  - 盛連
    - 会津(芦名) 光盛
      - 経光
      - 泰盛
    - 三浦介 盛時 ― 頼盛 ― 時明 ― 時継
    - 時連
      - 頼連
      - 行連
  - 家連
  - 高継 ― 高通 ― 高明 ― 時高 ― 高救
  - 導寸 義同
    - 義意
    - 正木 時綱 ---------- (三浦男爵家)

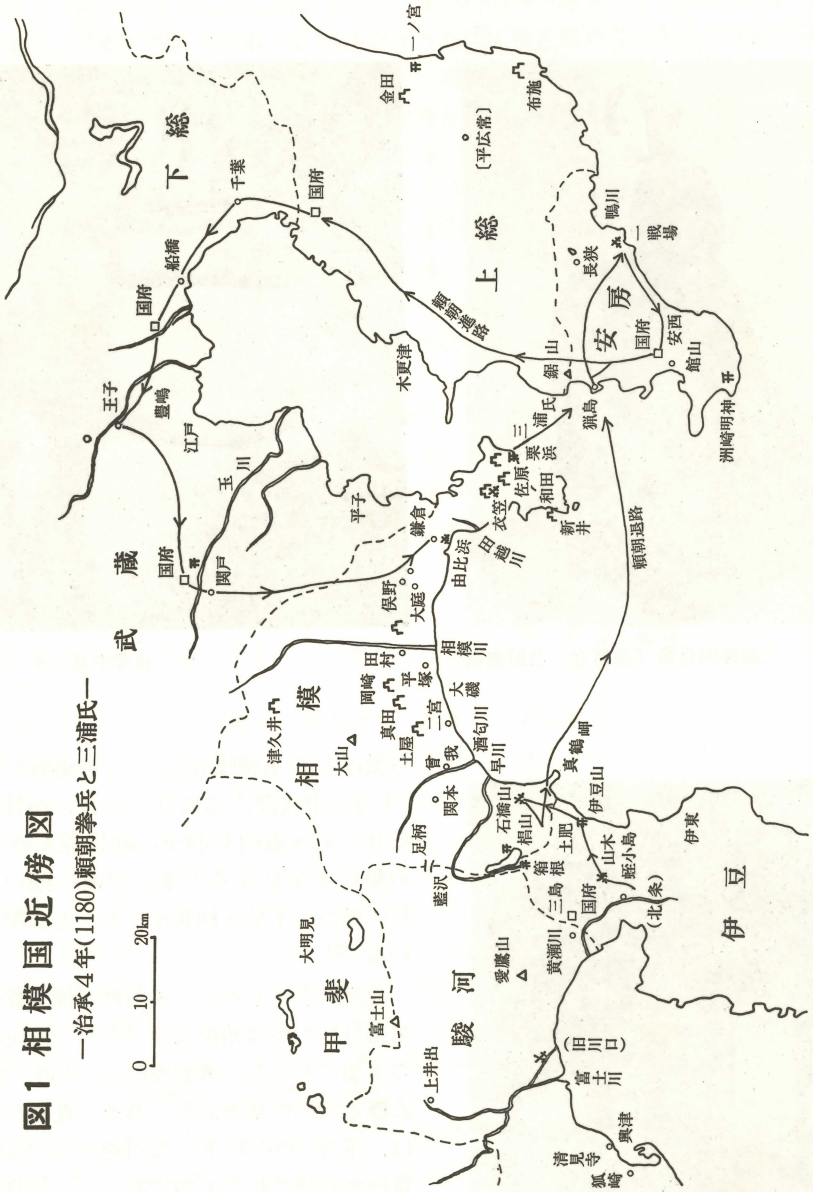


図1 相模国近傍図

—治承4年(1180)頼朝挙兵と三浦氏—

0　10　20km

負傷で没した。[7] このため，次男の矢部次郎義澄が，義明没後，三浦氏宗家を継ぎ，族長となり，父の遺命を守り，一族をひきいて各地に転戦し，勲功を建てた。建久3年(1192)頼朝が征夷大将軍に任ぜられた時に，義澄は族長として，その除書を鶴岡八幡宮で勅使か

三浦義明肖像（満昌寺）当館複製

伝三浦義澄墓（薬王寺跡）

元応元年板碑（薬王寺跡，満昌寺に移転）

ら受けとる名誉に浴した。「吾妻鏡」は，「十万人中義澄，この役に応え，面目絶妙なり，亡父義明を将軍に献じ訖んぬ，その勲功は鬚を剪ると雖も没後に酬いかたし，仍つて子葉を抽賞せらる」と表現している。[8]

義澄が在名を称した矢部郷（横須賀市大矢部町）の地は始祖為通以来の三浦氏嫡流の本領であった。清雲寺には，為通，為継，義継と三代の墓がある。為通，義継の2基は，深谷(同町)にあった円通寺(廃寺)の岩窟内から移されたものである。[9] 義明の墓のある満昌寺は，頼朝が義明追悼のために建立した寺であり，[10] 境内の御霊社[11] には義明の肖像が安置されている。東隣の薬王寺[12]（廃寺）跡には義澄の墓と伝える石塔がある。

2　三浦義澄と周防国　――源平合戦――

寿永3年(1184)2月，平家は，源範頼，義経両軍の攻撃で，摂津国一ノ谷の陣地から，讃岐国屋島の根拠地に敗走した。[13] 其後，源氏は，海戦に優れた平家追討に対し，水軍の準備などで約半年を費した。此間平家は，瀬戸内海周辺諸国を勢力圏に置き，源氏の進攻に備えた。これに対して頼朝は，山陽道から九州に軍を進めて，屋島の平家の後背を断つ作戦を建てた。元暦元年（1184）8月8日，範頼は，北条，足利，武田，千葉，三浦，比企，工藤などの有力御家人の軍勢1,000余騎を従え，鎌倉を発して西海に向った。三浦一族では，三浦介義澄，その子義村，和田義盛，宗実，義胤，大多和義成などであった。[14] 9月1日，京都を発した範頼軍は，山陽道を進み，平家の軍を打破り，10月12日には安芸国で功賞を行った。[15] 対岸，周防国大島（屋代島）の東部島未荘に城を構えて守備していた平知盛[16] は，この時点で長門の彦島に退いたものと推測されている[17] 周防国に入った範頼軍は，遠石荘（徳山市）で内藤盛家の一党を打破り[18] 長門国赤間関（下関市）に到着した。しかし，その地で兵糧の徴収が困難となり，兵船もなく将兵の動揺も起って，元暦2年(1185)正月12日，周防国に引上げなければならなかった。[19] 同月26日，豊後国の臼杵惟隆，緒方惟栄兄弟が兵船82艘を献じ，又周防国住人宇佐那木遠隆が兵糧米を献じたことにより，豊後国に渡海出来た。この時，義澄は周防国に留り，京都，鎌倉との連絡を命ぜられた。[20] 義澄の陣営については資料がないが，前年源氏に抵抗した内藤氏の本拠の遠石荘を避け，その東方で山手の山陽道にも近く沿海警備にも便利な都濃郡未武荘（下松市）内と推考されている。[21]

一方，西国の範頼軍の苦境の報告を受けていた鎌倉の頼朝は，京都の義経に同年2月，屋島の平家を討つべく命令を下し，義経は，2月19日，平家の陣地を奇襲し，屋島から西走させた。[22]

屋島合戦後，ただちに源氏が追撃せず，約1ヶ月も経たことは，平家討滅に充分な水軍の準備を必要とし，其間義経は，周防の実力者，大内氏との交渉をしていたものであろうとされる。[23] 3月21日，源軍が周防国大島津に入港に当り，在庁官人船奉行の船所正利が軍船数10艘を差出した。[24] これは，上官である周防権介大内盛房，弘盛父子の了解のもとに行われたものと解釈されている。[25] 又，大内父子（当時多々良姓）が，平家に上り関東に配流された事件[26] もこの時，源氏に味方した遠因とも考えられる。当時官船の係留地は国府（防府市）東南隅に当り，現在小字「船所」の地名が残っている。

三浦義澄は翌22日に大島津に参合した。義経は，義澄に,「汝は門司関を見るものなり，今，案内者と謂うべし，然れば先登すべし」[27] と，水軍の先導役を命じた。これは，義澄が門司関対岸の赤間関に，範頼軍に従い到着し，その状況を知ることによるものである。又，三浦氏は，相模国三浦半島の支配により，その水軍は[28] 近海を制し，安房にも進出して居ることからも，東国武士団の中でこの点にも適材であったと云えよう。大島津の位置については，柳井津[①]（柳井市）屋代島の小松開作（大島郡大島町）付近[②] などの説があるが，壇ノ浦までの距離や時間の関係から，周防国都濃郡の旧大島村にもとめる説[③] が有力視される。[29] 即ち，笠戸浦の地となる。即ち，笠戸島と大島（太華山）の間の水域の笠戸湾で，大半は，水深11～16m，底質は泥で，何処でも錨地を得られるのである。[30]

源氏水軍は義澄の先導で，翌23日に奥津辺に進出した[31①]「奥津（おいつ）」は長府の南，串崎沖の満珠島で，その手前の干珠島を「平津（へいつ）」と呼んだ。[31②]「奥津辺（おいつ）」とは，長府の南の串崎

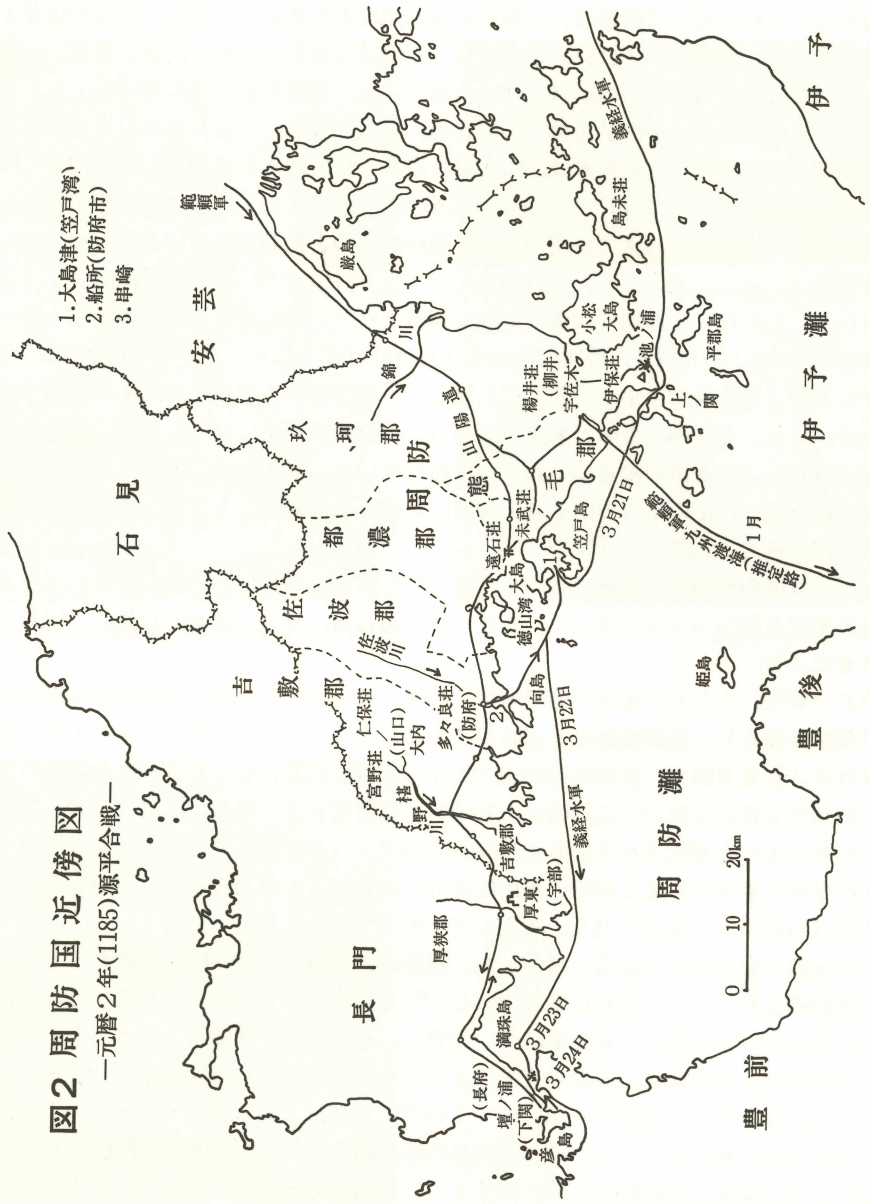


図2 周防国近傍図
—元暦2年(1185)源平合戦—

満珠，干珠両島遠望（幕末毛利氏築城の櫛崎城跡裏山より）

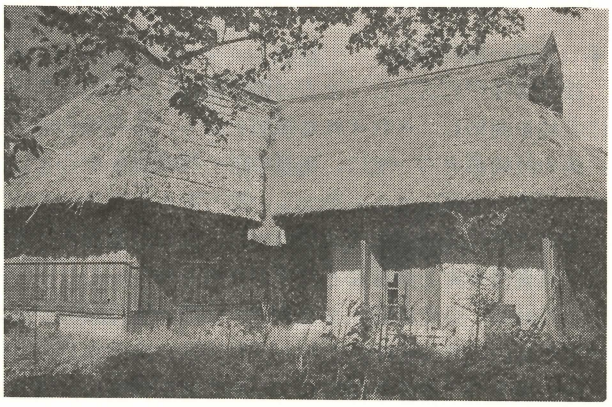
沖の満珠島を指すと云われる。義経は直接の水先案内として，関門海峡の潮流にくわしい「串崎」の船頭を傭ったことが「梅松論」(32)に伝えられる。この船頭の周旋は，長門の有力者，厚東武光であったろうと云われる。(33)

24日早朝から開始された戦闘は，最初，源氏は平家方の攻勢に圧迫されたが，義経は敵の水手（かこ），舵取（かじとり）を射殺す戦法を案じ，平家軍を混乱させた。(34)潮流も午後からは西流にかわり，源氏方に有利となり，平家は壇ノ浦に追いつめられ，全滅したのであった。(35)

安徳天皇始め平家一門を葬った阿弥陀寺の地が現在の赤間神宮（下関市阿弥陀寺町）にある。神宮所蔵の重要文化財「長門本平家物語」20冊は，今次の戦災で危く焼亡を免れたが焦げ跡がなまなましい。重要美術品「安徳天皇御事蹟及源平合戦絵図」8幅は，もと阿弥陀寺の安徳天皇御影堂の障子絵であって，その引手の跡が幅についている。最後の2幅が壇の浦合戦図であり，御座船を中心に多数の兵船が群っている。この絵は室町中期の絵師土佐光信画と伝える。近年，当館購入の「源平合戦図屏風」は，江戸初期の土佐派の画くもので，神宮の絵はこの源流といえよう。

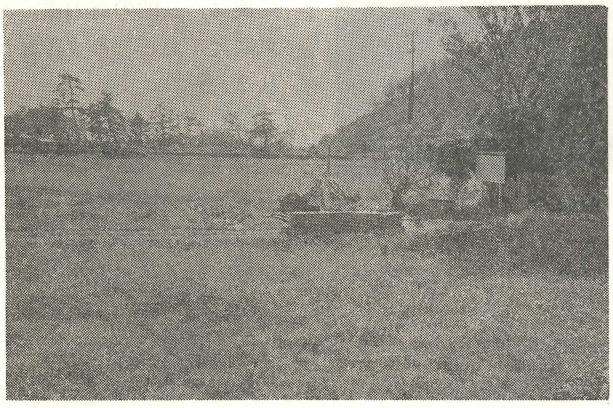
3　周防国合戦と平家一門の門脇家

梶原景時が頼朝に送った合戦報告書の中に「周防国合戦」の語がみえ，その時，白旗一流が中空に出現し，味方の軍が見る内に雲間にかき消えたと記されている。(36)この合戦場は，熊毛郡阿月村字池の浦（柳井市）であることが，現地の伝承や記録などから知られる。この時期は，大島津に義経の水軍が到着する直前の3月中旬ごろであったと推測される。(37)池の浦は室津半島の突端，皇座山東南麓で，この地に大池があった。平家軍は池の堰を切り，船を乗入れ隠れていたが，カモメの大群の鳴声を聞いた源氏方に発見され合戦となったと伝える。「白旗一流」のことは，このカモメの大群の飛さる姿がすりかえられたものであろう。現在もこの地には，セグロカモメと



相ノ浦「平家屋敷」（門脇家）

ウミネコの混群がこの時期に飛来するとのことである。[38] この合戦で破れた平家方の落人に門脇中納言教盛の5男業盛の嫡男教長が居り，背後の山づたいに相ノ浦に下り，民家に隠れ剃髪したと伝える。[39] 同地には門脇(かどわき)家の子孫が住んでいたカギ型の藁葺家が残り，地元ではこれを「平家屋敷」と呼んでいる。家屋は，この地方には見られない寝殿造の様式とみなされ，床も高い。門脇家の過去帖に，「教長地民落法名蓮寿　宝治二戊申（1248）二月十八日死ス」とあり，江戸時代には門氏を称し，明治になり門脇姓に復帰したことが記されている。[40] 池ノ浦の大池跡の湿地帯は，探訪当時埋立中であった。又，同地には門脇家の親類の旧家池田氏が住み，近くの平家神社を守護し，庭前には県指定天然記念物の「連理のカエデ」の老木がそびえている。



池ノ浦古戦場（大池跡）

＜忠快律師と三浦義澄＞門脇一族は，教盛は壇ノ浦で入水，教長の叔父の忠快は，合戦後捕われ，伊豆に配流された。[42] 文治5年(1189)京都に召還され [43] 建久6年(1195)頼朝が東大寺供養で上洛し，同年7月下向の時に伴われて鎌倉に至った。[44] この時，三浦義澄は忠快を三浦の地に招き，その教に帰伝した。[45] 門脇一門の忠快は，比叡山で修行し，東山三条小川にあった父，教盛の旧邸に宝菩提院を建立し，台密十三流の一の小川流を樹立し，「小川法印」とも呼ばれた「碩学」であった。[46] 義澄は忠快のために三浦郡金谷村の地に館を設けたと伝える。[47] 忠快は嘉禄2年(1226)6月，鎌倉で大慈寺三重塔の供養導師を勤めた後[48] 12月には京都小川殿で承澄に法脈を伝え(67歳)[49] 翌年3月16日に没した。[50]

周防相ノ浦の教長は，叔父の忠快が鎌倉で活躍していた当時，生存していたわけであるが，相互に知るよしもなかったものであろうか。

4　三浦一族の盛衰

相模国在庁官人としてその国務に参加した三浦大介義明 [51] の一族は，三浦半島を中心に各地を開拓し，それぞれの城館を持ち，その地の地名を名字とした(系1)。但し，義明の弟の岡崎義実の一党は，相模中部の岡崎城を中心として独立の姿であり，頼朝の山木討伐，石橋山合戦に早くも参加し，別行動をとっていた。[52]

義澄の時代には，和田義盛の一門，及佐原義連の一党は，幕府創業期の勲功により，族長三浦義澄宗家とほとんど対等の立場を持ち，ここに三浦党の四大勢力圏が生れた。[53]

この結果，全党の統一を欠き [54] 和田の乱(1213)では岡崎系は和田氏に与党し，三浦宗家は北条氏と共に和田氏を討ち，[55] 宝治の乱(1247)では佐原氏は北条氏に加担して，[56] 宗家滅亡後その三浦介を継承して子孫これを世襲し，後北条氏により滅ぼされるまでその勢力を維持した。[57] 永正13年（1516）北条早雲に攻められ，新井城（三浦市油壺）で討死し

た。[58]三浦導寸義同はその子孫である。（系図２参照）

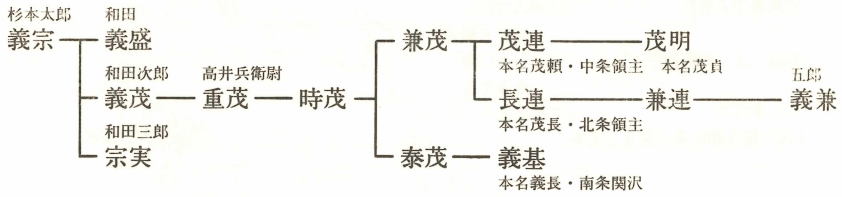
〔三浦一族と守護地頭制度〕

文治元年(1185)大江広元の建議により源頼朝は，守護，地頭の制度を定め，ついで承久の乱(1221)後の北条氏による新補地頭の設置がなされ，鎌倉幕府の全国的支配組織が固まった。三浦一族もそれぞれの勲功により諸国にその支配を有するに至った。（地図３）

三浦宗家は，相模国守護を世襲すると共に，義村は，紀伊，河内，土佐を，（その子）泰村は河内，（その子）光村は讃岐の守護に任ぜられた。和田義盛は美作，佐原義連は，紀伊，和泉，弟，家連は紀伊であり，又，義連の系では伯耆国守護を勤めている。[59]

地頭職では，芦名為清，為保父子の阿波国久千田荘，佐原家連の紀伊国南部荘などの補任が知られる。[60]特に，ここに支族，庶子家の場合，地方に下向し，在住し，その後裔の諸家に相伝文書，系譜が残存することが注目される。即ち，和田義盛の弟，義茂系が越後奥山荘の地頭として子孫これを継承し，又，肥前彼杵荘戸八浦などの地頭に補任された深堀家があり，この家系は越後和田氏の系統となっている。[61]本稿にとりあげた周防の平子

３．越後和田系図(中条家文書)



４．三浦深堀系図(佐賀諸家系図)

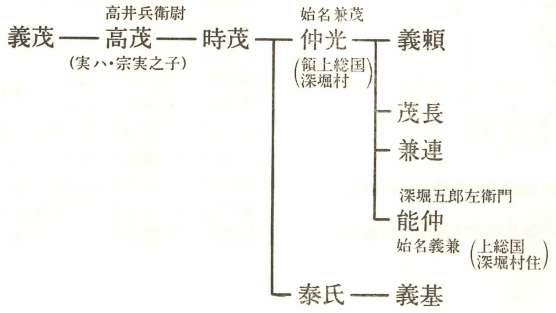
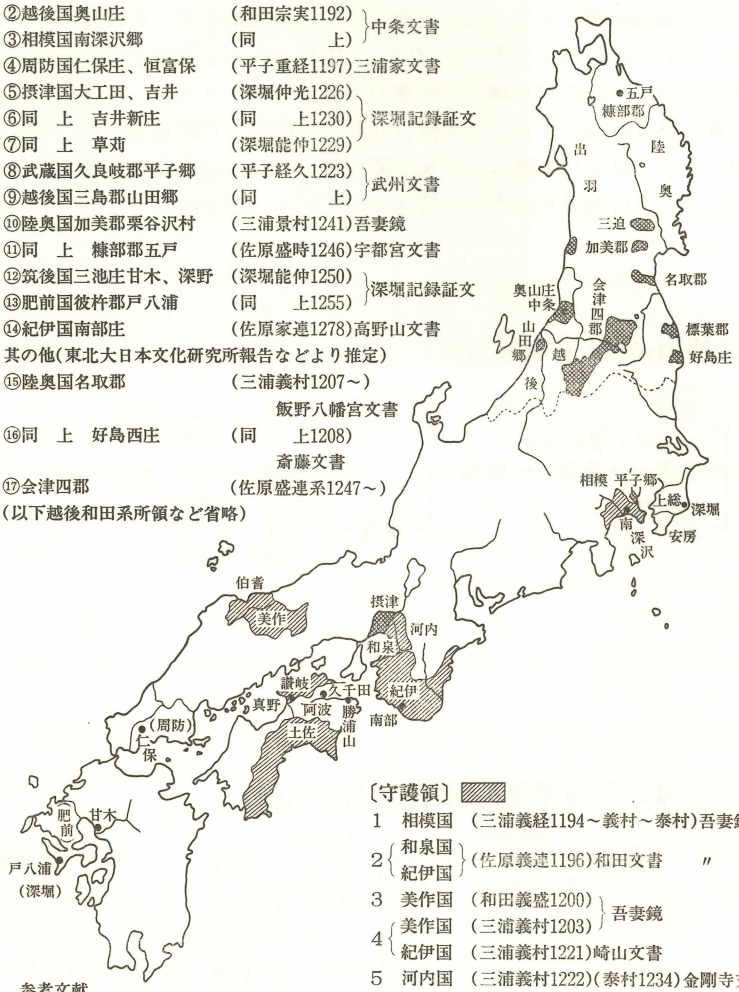


図３ 鎌倉時代三浦一族守護・地頭領関係図

〔地頭領〕　　〈出典史料〉

①阿波国久千田庄　（芦名為保1186）吾妻鏡
②越後国奥山庄　（和田宗実1192）
③相模国南深沢郷　（同　上）　中条文書
④周防国仁保庄、恒富保　（平子重経1197）三浦家文書
⑤摂津国大工田、吉井　（深堀仲光1226）
⑥同　上　吉井新庄　（同　上1230）　深堀記録証文
⑦同　上　草苅　（深堀能仲1229）
⑧武蔵国久良岐郡平子郷　（平子経久1223）
⑨越後国三島郡山田郷　（同　上）　武州文書
⑩陸奥国加美郡栗谷沢村　（三浦景村1241）吾妻鏡
⑪同　上　糠部郡五戸　（佐原盛時1246）宇都宮文書
⑫筑後国三池庄甘木、深野　（深堀能仲1250）
⑬肥前国彼杵郡戸八浦　（同　上1255）　深堀記録証文
⑭紀伊国南部庄　（佐原家連1278）高野山文書
其の他（東北大日本文化研究所報告などより推定）
⑮陸奥国名取郡　（三浦義村1207～）
飯野八幡宮文書
⑯同　上　好島西庄　（同　上1208）
斎藤文書
⑰会津四郡　（佐原盛連系1247～）
（以下越後和田系所領など省略）



〔守護領〕

1　相模国　（三浦義経1194～義村～泰村）吾妻鏡
2　和泉国・紀伊国　（佐原義連1196）和田文書　〃
3　美作国　（和田義盛1200）
4　美作国　（三浦義村1203）　吾妻鏡
　紀伊国　（三浦義村1221）崎山文書
5　河内国　（三浦義村1222）（泰村1234）金剛寺文書
6　讃岐国　（三浦光村1243）吾妻鏡
7　紀伊国　（佐原家連1223）高野山文書
　伯者国　（佐原氏1275ごろ）伯者大山寺文書

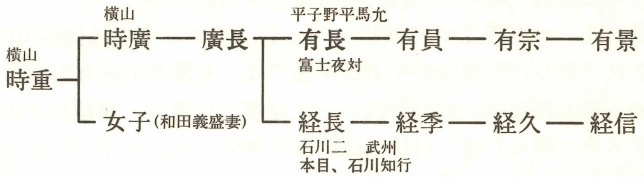
参考文献
安田元久「地頭及地頭領主制の研究」
参考文献
佐藤進一「鎌倉幕府守護制度の研究」

氏の場合もこれらの例であり，これらの家の子孫は何れも，遠祖，相模三浦氏の出自を誇示しているのである。

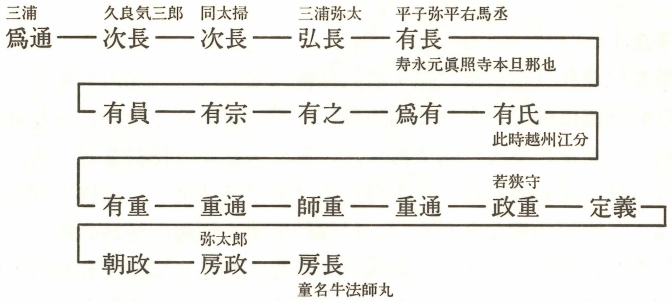
5　平子氏の出自と平子郷

「三浦家文書」(62) に建久8年（1197）平子重経が，周防国仁保荘並に恒富保（現山口市内）の地頭職に補任され，その嫡流は代々仁保荘を継承し，室町時代には仁保氏と在名に

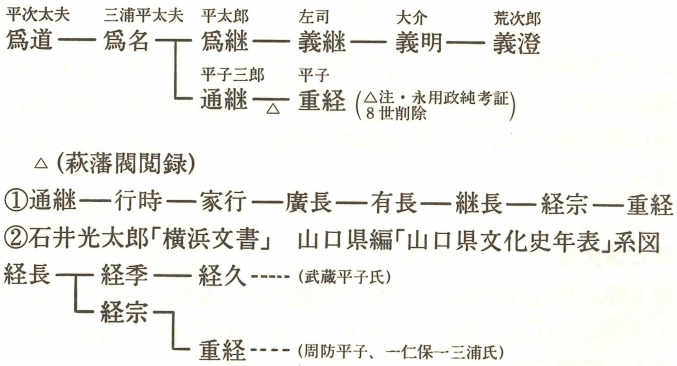
5．武蔵七党系図小野氏・横山(系図綜覧)



6．平子系図(越後)



7．三浦氏系図周防「三浦家文書」



改め，其後，三浦氏を称するに至ったことが記されている。これは，この平子氏の始祖を相模国三浦氏の庶子家，平子通継とすることによる。一方，「武蔵七党系図」(63) に，横山時広の子，広長が始めて平子を称し，長男有長は平子を，次男経長は，武州本目(本牧)，

石川を知行し，石川を称したことが記され，平子氏は横山党の後裔となる。これに対して石井光太郎氏は，越後の平子系図や，周防の三浦家系図などから，七党系図に広長が横山党に入れられていることは，系図上の誤りであり，重経は，平子経長の系統と説かれている。(64)

武蔵国久良岐郡平子郷（現横浜市内）は，禅馬（岡村，滝頭を含む）石河（堀之内，横浜，中村）本牧，根岸の旧諸村に亘った地域である。(65)これら平子郷関係の古文書を多く所蔵する石川の宝生寺は，寿永元年(1182)有長開基の磯子の真照寺と共に平子氏の私寺と云える。室町時代末期，後北条氏の関東攻略と共に，平子郷もその支配下に属し，(66)蒔田に居城を構えた吉良氏（蒔田吉良氏）の所領となった。(67)

平子氏は，鎌倉時代の寛喜3年（1271）には，経長の子経季が越後国山田郷（三島郡内）地頭職を補任されて居り，(68)越後の平子氏系図では，有長の子孫有氏の時に越後に分れたとする。有氏の子孫の朝政は，室町時代，越後守護上杉房定，房能父子の重臣であり，(69)その後房長（童名牛法師丸）は，村松（長岡市）蓐生（小千谷市）などを領し，長尾房長に与党した。(70)武蔵平子郷の本領は房長当時まで所領であった。(71)大永4年(1524)北条氏綱の江戸城攻略ごろ越後に退転したものであろうと(石井氏は考察)される。(72)

〔周防の平子氏〕

周防国吉敷郡仁保荘（山口市仁保・旧仁保村北部）は，同郡内を南北に流れる仁保川流域である。この下流は椹野川となり周防灘に注ぐ。建久8年(1197)重経地頭職補任当時，西隣の宮野荘は，奈良の東大寺領であった。(73)文治2年(1186)3月，周防国は，東大寺造営料所に当てられ，その大勧進の俊乗房重源は後白河法皇より国務管理を命ぜられた。(74)翌月，重源は，工匠陳和卿などを率い，仁保荘東隣の佐波郡徳地の杣山に入り，(75)用材の搬出を開始した。宮野荘は，東大寺落成供養の建久6年まで，陳和卿の料所にあてがわれていた。(76)仁保荘南隣の旧大内村の地は，大内氏が早くから本拠とした地であった。大内氏の祖先は，百済聖明王の第3子琳聖太子と伝え，周防国多々良浜に上陸し子孫の正恒が始めて多々良姓を賜ったとある。(77)盛房以来，大内介，権介を称し，在庁官人として国衙に在勤した。(78)

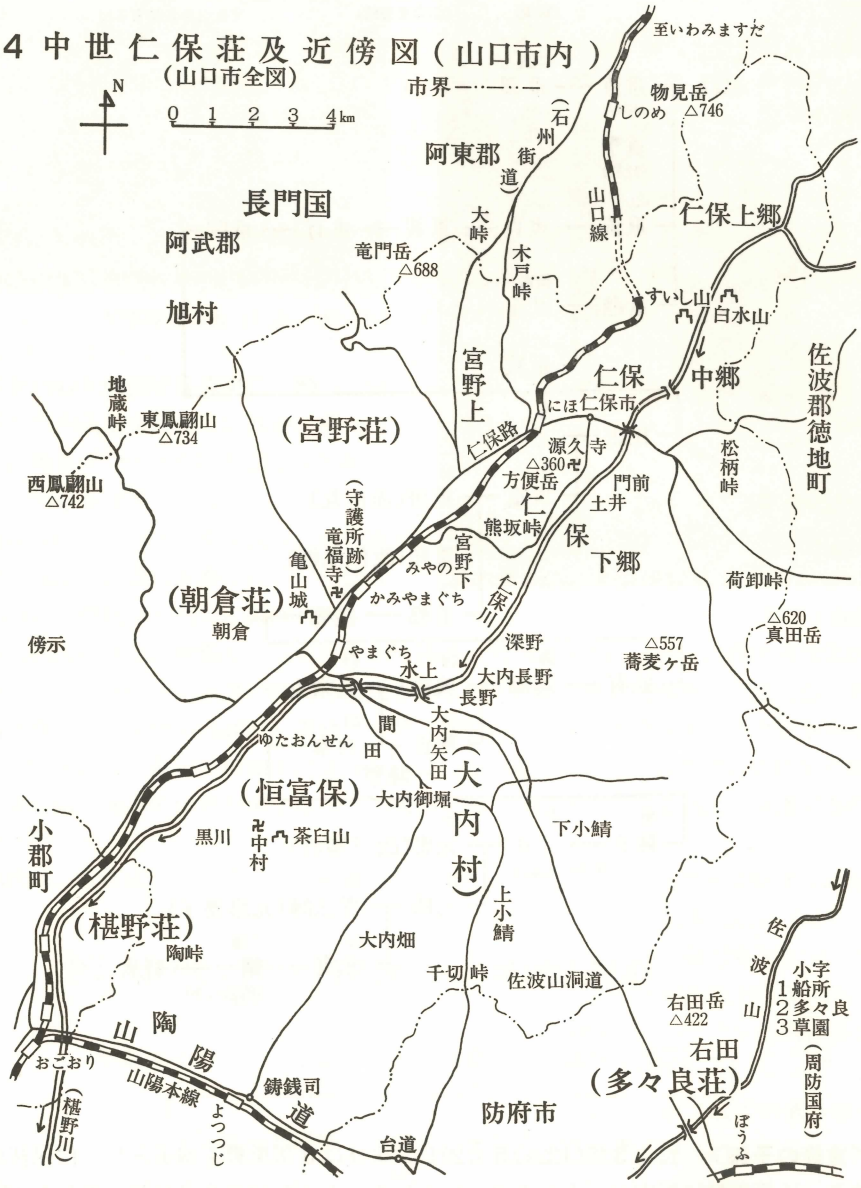
建久3年(1192)重源は，大内介弘成が杣出しを妨げると幕府に訴えている。(79)東大寺の国務支配は重源以後も鎌倉時代を通じて行われ，(80)大内氏の勢力はこれに対抗した。(81)

一方，幕府は蒙古襲来により，異国防衛の要地として，北条一門の長門守護をして周防守護を兼務させた。(82)

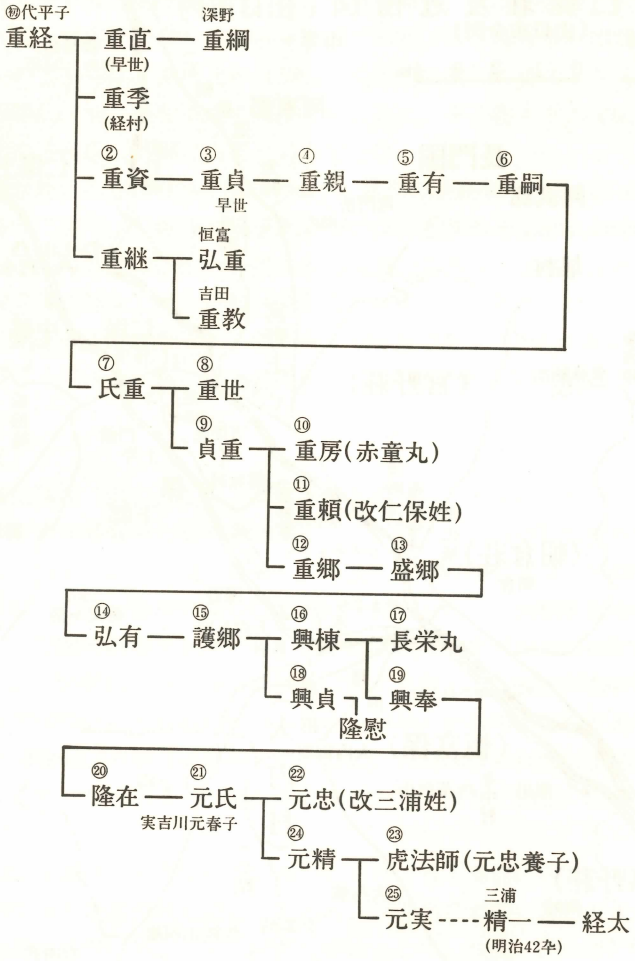
＜重経の居所と源久寺＞

山口市仁保下郷土井河内の地は，重経の居館のあった地とされている。(83)
この地の源久寺伝によれば，重経は，まず，長和2年(1013)大内氏の建立と伝える正法寺に入り居を構え，頼朝没年の正治元年(1199)隣地に源久寺を創建し，頼朝の霊牌を安置したと云う。以後源久寺は平子氏の菩提寺となった。寺蔵の武人法躰の木造坐像（像高87.7㎝)は，鎌倉時代初期の作で，開基重経の坐像とされる。(県指定文化財）本堂東南のクロガネモチの樹側にある宝篋印塔（総高210㎝）が重経の墓である。墓の東の「宮の壇」と呼ばれる地は，重経が鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請した地と伝える。

図4 中世仁保荘及近傍図（山口市内）

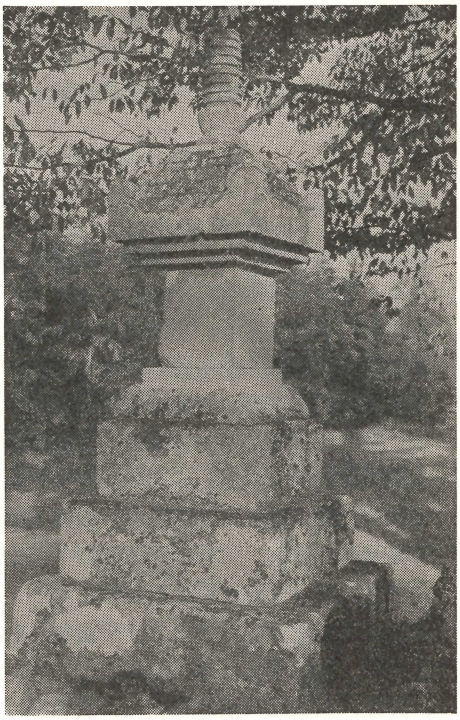


8．周防三浦氏系図　①三浦家文書（山口文書館）　②山口県文化史年表諸家系図（七平子、仁保三浦）



＜重経の子孫＞　貞応3年(1224)5月29日，重経は3男重資を嫡子とし，仁保荘地頭職を譲り，4男重継に恒富保（山口市黒川付近）を与え，(84)同年9月14日に没した。(85)重継の子弘重は恒富，重教は吉田の在地名を称した。(86)始祖重経の嫡流は，5代の重有以来，仁保荘5ヶ郷（上，中，下郷と深野，長野）の他に，国府近郊の多々良荘（防府市の地頭も兼任し，(87)6代重嗣の時に南北朝の動乱期を迎えた。延元元年(1336)重嗣は，足利尊氏方に属し，京都（①）や石見国（②）に転戦した。(88)当時，大内氏は，庶流の大内長弘が尊氏に味方し，北朝方の周防国守護となり，重嗣はその庇護のもとに尊氏から所領を安堵され

平子重経肖像（仁保　源久寺）



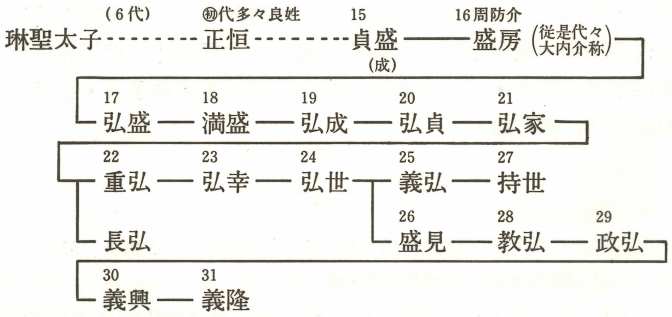
伝平子重経墓

た。(89) 長門の北朝側守護厚東氏の勢力を滅し(90)①た大内氏宗家弘世も，其後，尊氏方となり，防長(②) ついで石見三国の守護(③)となり，山口を守護府とした。

大内氏支配下に入った平子氏は，11代重頼の時に在名の仁保氏を称した。(91) 弘治3年（1557）大内氏は毛利氏に滅ぼされ，仁保氏は毛利氏に降り，所領を安堵された。(92) 其後，毛利元就の孫，吉川元春次男元氏が21代当主となり，その子，元忠の時に三浦氏を称した。(93) この血族関係から三浦元忠は毛利氏の信任厚く，天正19年（1591）周防，長門，安芸の内から，所領計1万6千石余を与えられた。(94) 又，山口亀山の城番も命ぜられ，このころから仁保荘の源久寺付近は毛利輝元長女，吉川広正夫人の化粧料地となり，以後江戸時代には源久寺は毛利氏の保護する所となった。(95)

毛利氏は，大江広元4男季光が相模国毛利荘に住し毛利氏を称したことに始まり，その

9．大内氏系図（大内系譜）〈山口県諸家系図〉



4男経光が安芸国吉田荘地頭職となって以来，代々吉田荘を本拠地とした。(96)この相模出身の毛利氏が大内氏を征した時期に，仁保氏が毛利一族から当主を迎え，三浦姓に復帰したことは，その同国出身の歴史的因縁と共に政策的にその家柄，家系を誇示したものであろう。

おわりに

頼朝が平家討滅に当り，範頼軍を鎮西（九州）に派遣したことは，作戦の妙であったと云える。範頼軍は敵地に乗込んだわけであり，苦労したが，壇ノ浦合戦に当り，義経軍の正面からの攻撃に対し，平家の退路をおさえ，平家を全滅に導いたのであった。又，九州渡海に当り，義澄を山陽道の要地に留め，京都，鎌倉との連絡に当らせたことも注目されよう。古来，太宰府，京都間を結ぶ山陽大路は，鎌倉時代の東海道，「京鎌倉往還」に直結し，特に元冠以来，鎌倉幕府の大動脈となったのである。

本稿の防長（山口県）二国の調査に対し，前年44年10月には，頼朝奥州征討の阿津賀志山合戦場（福島県伊達郡国見町）の奥州軍陣地の二重濠遺跡を中心に調査をした。この決戦で奥州軍は破れ，大将の藤原国衡（西木戸太郎）は，和田義盛の矢に当り討死し，(97)以後，平泉に向って鎌倉軍の追撃戦となり，三浦義澄も栗原郡三迫（さんのはざま）（宮城県）の要害で，若次郎なる武士を討取っている。(98)戦後，この三迫の地は名取郡（宮城県）などと共に勲功賞として，和田義盛に与えられたものと，推測されている。それは和田の乱後の遺領処分で，其後，三迫は二階堂行光に，名取郡は三浦義村に与えられた「吾妻鏡」の記事などによる。(99)これら三浦氏関係の奥州所領，又，越後の奥山荘（新潟県北蒲原郡北部から岩船郡南部）などについても述べたい所であったが，今回は紙面の都合で割愛せざるを得なかった。但し，「奥山荘波月条絵図」，（紙本着色31×52.5㎝）は，建治3年（1277）三浦和田一族の長，高井時茂が3人の孫(茂連，茂長，義基)に分け与えた当時のものとされる。(100)中世の荘園図としては，当館では鎌倉円覚寺領「尾張国富田荘絵図」が複製されたが，これと並び，複製展示されたいものである。これと共に広く，本県と他県との歴史的交流に関する資料の収集により，一層の展示の充実がはかられるものと考える次第である。

本稿は，当館「中世歴史資料調査」の一環として「三浦義澄とその一族」をテーマとして調査した当時の資料の一部にすぎない。

最後に，本稿関係で直接御教示，御協力を賜った下記の方々並びに，文献資料を参考とさせていただいた各位に対し，謝意を表する次第である。元山口大学教授・川副博，東大史料編纂所教授・杉山博，柳井市国書館長・谷林博，山口県文書館専門研究員・広田暢久山口市仁保源久寺住職・蔵本永生，赤間神宮禰宜・水野直房，横須賀市大矢部満昌寺住職永井宗源，横浜市史編纂所・石井光太郎，県文化財保護審議委員・赤星直忠（肩書は昭和45年当時，順序不同，敬称略）

〔注〕

（1）　桓武平氏系図。三浦系図（続群書類従巻138，同書完成会　6輯上　1957）
（2）　奥州後三年記。陸奥話記（群書類従巻369。同上）
（3）　天養記　天養2年3月4日，官宣旨案（神宮文庫，神奈川県史(1) 古代782号）
（4）　平治物語　義朝奥波賀に落ち着く事（日本古典文学大系1967　岩波書店）

（５）　吾妻鏡　治承４年６月27日条（新訂増補国史大系32　吉川弘文館）以下同。
（６）　〃　治承４年８月27日条
（７）　三浦系図（注１同）
（８）　吾妻鏡　建久３年７月26日条
（９）　赤星直忠「三浦党墳墓改葬に立合いて」（神奈川文化創刊号　1940）
（10）　①吾妻鏡　建久５年９月29日条。②満昌寺縁起。
（11）　伝建暦２年(1212)和田義盛建立「新編相模国風土記稿」三浦郡大矢部村条
（12）　明治９年廃寺となる。元応元年(1319)銘の板碑は満昌寺に移管。
（13）　吾妻鏡　寿永３年２月15日条
（14）　〃　元暦元年８月８日条
（15）　〃　元暦元年10月12日条
（16）　〃　文治４年12月12日条
（17）　三坂圭治「山口県の歴史」山川出版社 1971 83頁
（18）　吾妻鏡　元暦２年１月６日条
（19）　〃　〃　１月12日条
（20）　〃　〃　１月26日条
（21）　前掲書（注17）91頁
（22）　吾妻鏡　元暦２年２月19日，21日条
（23）　前掲書（注17）86～87頁
（24）　吾妻鏡　元暦２年３月21日条
（25）　前掲書（注17）86頁
（26）　玉葉　巻27　治承２年10月８日条（哲学書院，上巻1908）
（27）　吾妻鏡　元暦２年３月22日条
（28）　①安田元久「源平の相剋」（国民の歴史７　文英堂　1968）275頁
　　②赤星直忠「三浦半島城郭史 上」（横須賀市博物館　1954）18頁
（29）　①吉田東伍「大日本地名辞書」富山房 1156頁
　　②御薗生翁甫「防長地名渕鑑」
　　③村上磐太郎説　前掲書（注17）　90～91頁
（30）　海上保安庁「内海水路誌」第10編周防灘 1951 290～291頁
（31）　①吾妻鏡　元暦２年３月22日条
　　②水野直房氏談によれば，両島は長府の忌宮神宮領で，これはその祭神神功皇后伝説によるもので，神宮では反対に手前を満珠島と称し，土地台帖もこれと同様とのことである。
（32）　梅松論 下（群書類従371巻，第20輯 1959）
（33）　川副　博「鎌倉時代と厚東氏」（厚東第１集（厚東史研究会）　頁
（34）　平家物語　長門本巻18（国書刊行会 1906）671頁
（35）　吾妻鏡　元暦２年３月24日条
（36）　〃　〃　４月21日条
（37）　前掲書（注17）89頁
（38）　谷林　博「軍記伝承より見たる源平周防国合戦」（『青年時代の国木田独歩』柳井市立図書館 1970　171～173頁
（39）　防長風土注進案（天保1842年ごろ編）前掲書（注38）　89～90頁，所収
（40）　前掲書（注38）　174頁。谷林氏撮影・写真
（41）　吾妻鏡　元暦２年３月24日条

(42)　吾妻鏡　文治元年8月26日条
(43)　〃　文治5年5月17日条
(44)　〃　建久6年6月25日条
(45)　①吾妻鏡　建久6年9月28日条
　　②納富常天「三浦義村の迎講」(三浦古文化2号 1967) 11頁
(46)　①望月仏教大辞典4 (世界聖典刊行協会　1963) 3651頁
　　②日本仏家人名辞典 (光融館　1903) 815頁
(47)　三浦郡社寺民戸古城旧蹟集　金谷村条 (三浦古文化　4号 1968 116頁，三浦古文化研究所)
(48)　吾妻鏡　嘉禄2年6月14日条
(49)　前掲書 (注46)
(50)　新撰大人名辞典4 (平凡社　1937) 252頁
(51)　吾妻鏡　承元3年12月15日条
(52)　〃　治承4年8月6日，12日，20日，26日条
(53)　羽下徳彦「惣領制」(日本歴史新書，至文堂) 1966，135～145頁
(54)　吾妻鏡　建久4年1月20日条
(55)　〃　建暦3年5月2～6日条
(56)　〃　宝治元年6月2日条
(57)　湯山　学「鎌倉後期における相模国の御家人について (一)」(鎌倉24号　鎌倉文化研究会，1975　4～26頁)
(58)　①北条記群書類従
　　②三浦系図 (前掲注1)
(59)　佐藤進一「増訂鎌倉幕府守護制度の研究」(東京大学出版会　1971)　伯耆大山寺縁起　続群書類従　第28上)
　　伯耆守護は佐藤氏は佐原時連の子の頼連か行連に比定されるが，湯山氏 (前掲57) は，小林清治氏説 (福島県史) で光盛の子経光が妥当であろうとされる。
(60)　安田元久「地頭及び地頭領主制の研究」(山川出版社　1961)
(61)　①「越後和田系図」中条家文書
　　②「三浦深堀系図」(佐賀諸家系図，内閣文庫)
(62)　「三浦家文書」山口県文書館 (大日本古文書　家わけ第14　所収)
(63)　「武蔵七党系図」(系図綜覧　図書刊行会　1925) 446頁
(64)　石井光太郎「横浜文書について，一古文書からみた中世の横浜」(『横浜文書』横浜市教育委員会，1953　26～27頁
(65)　前掲書 (注64) (『横浜文書』1，11，13，22号)
(66)　永正9年12月6日　北条宗瑞，氏綱　本目四ケ村制札 (『歴代古案』所収，横浜文書23号)
(67)　前掲書 (注64)　31頁
(68)　貞永2年(1233) 4月15日　将軍家 藤原頼経 政所下文 (『諸州古文書』所載　横浜文書1号)
(69)　①明応5年 (1496) 10月20日　平子朝政，斎藤珠泉連署書状，(三浦和田中条氏文書，越後文書宝翰集)
　　②文明4年(1472)11月16日，平子朝政書状 (三浦和田黒川氏文書，奥山庄史料集，新潟史学)
　　③井上鋭夫「新潟県の歴史」(山川出版社 1970) 90頁，永正4年(1507)朝政討死
(70)　①前掲書 (注69—③)
　　②永正6年(1509)11月13日，上杉顕定書状，石井光太郎「越後平子文書」所収 (郷土よこはま　20号　横浜市図書館　10頁)
(71)　前掲書 (注66)

(72)　前掲書（注64）　31頁
(73)　建久８年２月24日，前右大将政所下文案　前掲書（注62）　三浦家文書
(74)　玉葉　文治２年３月23日条　前掲書（注26）
(75)　東大寺造立供養記（山口県編，増補改訂山口県文化史年表，マツノ書店　1975　77頁）
(76)　上司文書　前掲書（注75）
(77)　大内系譜「大内多々良譜牒」（内閣文庫）
(78)　前掲書（注17）　115頁
(79)　吾妻鏡　建久３年正月19日条
(80)　但し一時，山城国法勝寺造営料国などになった「愚管抄」（前掲75　77頁）
(81)　前掲書（注17）　107～111頁
(82)　前掲書（注59）　177頁
(83)　御薗生翁甫「防長古城趾の研究」マツノ書店，1975　28頁
(84)　貞応３年５月29日，平子西仁（重経）譲状案（三浦家文書）
(85)　河野通毅「源久寺誌」源久寺，1961　2～14頁
(86)　三浦家系図（三浦家文書）
(87)　①文保元年(1317)10月16日，平子重有譲状案（三浦家文書）
　　②観応元年(1350)８月12日，平子重嗣譲状案（同上）
　　③正平８年(1353)卯月10日，平子氏重譲状案（同上）
　　④文中元年(1372)２月11日，平子重世譲状案（同上）
(88)　①建武３年(1336)９月１日，平子重嗣軍忠状
　　②暦応３年(1340)12月12日，鷲津弘員注進状（三浦家文書）
(89)　建武３年４月15日，高野師直奉書案（三浦家文書）
(90)　前掲書（注75）（山口県文化史年表　85～87頁）
　　①正平10年(1355)（厚東系図）
　　②貞治２年(1362)３月（太平記）
　　③永和２年(1376)閏７月14日条（益田家文書）
(91)　①三浦家文書
　　②14代仁保弘有は明応８年(1499)に没し，その寿像１幅（絹本着色39.5×75㎝）に，天与清啓（雪舟と親交のあった五山の名僧）の賛がある。
(92)　渡辺世祐「毛利元就卿伝，上巻」（六盟館，1944）391～392頁
(93)　（三浦家文書）
(94)　天正19年(1591)霜月９日，毛利氏年寄連署知行注文（三浦家文書）
(95)　源久寺誌　18～20頁
(96)　前掲書（注92）　60～61頁
(97)　吾妻鏡　文治５年８月10日条
(98)　〃　〃　21日条
(99)　〃　建暦３年５月７日条
(100)　①絵図。中条町役場蔵。
　　②「時茂譲状」(イ)同役場蔵「中条家文書」。奥山庄史料集（新潟県文化財調査報告書第10）所収。
　　③阿部洋輔「奥山庄波月条絵図考」（新潟史学創刊号，新潟史学会　1968）62～69頁。